

おうしゅうあだちがはら

奥州安達原

〔解説〕

宝暦十二（一七六二）年九月、竹本座で初演。奥州の伝説「善知鳥（うとう）」や「黒塚」を取り入れ、近松半二、竹田和泉、竹本三郎兵衛らが書いた時代物。八幡太郎義家の奥州攻め（前九年の役）で滅ぼされた安倍頼時の遺子、貞任（きだとう）、宗任（むねとう）兄弟が復讐をはかる苦心を描いている。もとの形は五段物であるが、五段目が上演されたのは、初演時と翌年正月だけである。眼目は三段目「環宮明御殿（たまきのみやあきごてん）」で、特に、盲目の袖萩が歌にのせて両親に不孝を詫びる場面は「袖萩祭文（そではぎさいもん）」と呼ばれ、有名。

〔三段目あらすじ〕

廉仗直方（けんじょう）なおかたの娘袖萩は、父に背いて浪人と不義をしたため勘当され、前九年の役の後、夫に離れ流浪の末に盲目となり、娘お君と朱雀堤で乞食になっている。通りかかった廉仗は、偶然それが勘当した娘だと知る。袖萩の方も、廉仗の家来の言葉から父が今迄ここに居て、皇弟の環の宮の行方が知れないという難儀に会っていることを知り、娘を伴い環の宮の御殿へと向う。

廉仗は環の宮を守護する立場だが、宮が誘拐されてしまい、行方を探している。義家に嫁している袖萩の妹の敷妙は、夫の使者として御殿へやって来て、宮の行方が知れない時は義家の役目として敵味方となる旨を伝える。

そこへ思いがけなくも義家が現れたので、廉仗は全て安倍一味の仕業ではないかと考えを述べる。義家も、瑞祥の鶴を殺した咎で捉えられていた南兵衛を引き出し、安倍宗任であろうと問いただすが白状しない。

折から廉仗の見舞に来た桂中納言則氏（実は安倍貞任）と南兵衛（宗任）は、それとなく兄弟の再会をし、源氏調伏を約する。

雪の降りしきる中、御殿にたどり着いた袖萩は、祭文に託して不孝をわび、娘お君に会ってほしいと願う。袖萩の夫が貞任であることを知った廉仗は、敵方の妻となった娘とはなおさら会われぬと、雪の中に母娘を置き、家に入る。

廉仗は環の宮を敵に奪われた責めを負って切腹。袖萩も宗任から、敵の源氏方である父を討てと渡された懐剣で自害する。則氏は実は貞任がなりすましていたことを義家に見破られ、謀も失敗に終わったと悔やむ。義家は兄弟に、勝負は戦場でと約し別れる。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

袖萩祭文の段

立つて入りにける

たださへ曇る雪空に、心の闇の暮近く、一間に直す

白梅も無常を急ぐ冬の風、身にこたゆるは、血筋の縁

不憫やお袖はとぼ／＼と親の大事と聞くつらさ、娘お

君に手を引かれ親は子を杖子は親を、走らんとすれど、

雪道に力なく／＼辿り来て、垣の外そと面に、

「ア、嬉しや、誰も見咎めはせなんだの」

「イ、エ門口に侍衆が、居睡つてゐやしやつた間に」

「フ、賢い子ぢや、僂仗様はこの春から主のお屋敷に

はゞござらず、この宮様の御所にと聞いて、どうやらか

うやら／＼まで来ごとは来たけれど、ご勘当の父上母

上様、殊に浅ましいこの形で、誰が取り次いでくれる

者もあるまい、お目にかゝつてご難儀のやうすがどう

ぞ聞きたや」

と、探れば触る小柴垣

「ム、こゝはお庭先の枝折門、戸を叩くにも叩かれぬ

不孝の報い、この垣一重が鉄くろがねの」

門より高う心から、泣く声さへも憚りて簀戸すどに、喰ひ

付き泣きゐたり。僂仗はかくとも知らず

「垣の外面に誰やら人声、アレ女どもはをらぬか」

と、云ひつゝ自身庭の面、外にはそれと懐かしさ、恥

ずかしさもまた先立って、掩ふ袖萩、知らぬ父、明け

てびつくり戸をぴつしやり

「なんのご用」

と腰元ども、浜夕も庭に立ち出でゝ

「僂仗殿なんぞいの」

「イヤなんでもない、見苦しいやつがうせをつて、腰

元ども追ひ出せ、婆、あんなもの見るものでない、こ

つちへお来やれ〜」

と夫の詞は気も付かず

「なにをきよと〜云はっしやる、犬でも這入りまし
たか」

と、なに心なく戸を開けて、よく〜すかせば娘の袖
萩、はつと呆れてまたばったり、娘は声を聞き知れど
『母様か』とも得も云はず、母は変りし形を見て胸一
杯に塞がる思ひ、押し下げ〜

「定めない世といひながらテモさても〜〜思ひ
がけもない」

「コレ〜婆なに云やる」

「イヤさあやつぱり犬でござんした、ほんに憎い犬め、
親に背いた天罰で目もつぶれたな、神仏にも見離され、
定めて世に落ち果て〜をらうとは思ふたれど、これは
またあんまりきつい落ち果てやう、今思ひ知りをった

か」

と、よそに知らずも涙声、やうす知らねば腰元ども

「さつても慮外な、物貰ひなら中間衆には貰はいで、
お庭先へむさくるしい、とつとと出や」

とせり立てられ

「ハイ〜ハアイどうぞこ了簡なされてまちつとの
間」

「ハテしつこい」

と女中の口々

「ヤレ待つてくれ女子ども、ヤイ物貰ひ、お銭あしが欲し
くばなぜ歌を歌はぬぞ、願ひの筋もなんなりと、歌う
て聞かせ」

と夫の手前、ちつとの間ひまなと隙入れたさ

「あい」

とは云へど袖萩が、久しぶりの母の前、琴の組とは引

きかへて、露命をつなぐ古絃ふるいとに、皮も破れし三味線の

「ばちも慮外も顧みずお願ひ申し奉る。

へ今の、憂き身の、恥づかしさ、

父上や母様のお気に背きし報ひにて、

二世の夫つまにも、引別れ、

泣きつぶしたる、目なし鳥、

二人が中のコレ、このお君とて、

明けてやう／＼十一の、

子を持つて知る、親の恩、

知らぬ祖父様祖母様を、

慕ふこの子がいぢらしさ、

不憫と思し、給はれ」

とあと歌ひさし、せき入る娘、孫と聞くより浜夕が

飛び立つばかり戸の透間、抱き入れたさ縋りたさ、祖

父も変らぬ逢ひたさを、隠してわざと尖り声

「ヤアかましい小唄聞きたうない、女子どもも奥へ

いて、お客人についてゐよ、皆行け／＼、イヤサば、

なにうぢ／＼、早く畜生めを擲き出して仕舞やれさ」

「ア、コレ、腹立ちは尤もなれどそれはあんまり」

「ハテさて、隙入れる程ためにならぬ、武士の家で不

義した女郎めらう、擲き出すとはまだ親の慈悲、長居せばぶ

ち放さうか、親の恥を思ふて、名を包むはまだしもと

思ひのほか、今となつて身の置き所がなさの詫び言、

恥面も構はずよくうせたな、たゞしは親へ面当に、わ

ざとその形見せにうせたか、憎いやつ」

と怒りの声、袖萩悲しさやる方なく

「なん／＼の誓文、勿体ないさりながら、さう思し召

すもご尤、大恩を忘れた淫奔いたづら、わが身ながら愛想のつ

きたこの体、お詫び申したとてお聞き入れがなんのあ

ろ、そりや思ひ切つてはをりまする。お屋敷の軒まで

も来られる身ではなけれども、お命にかゝる一大事と聞いて心も心ならず、顔押拭うて参りました。不孝の罰で目はつぶれる、この子を連れてこゝの軒では追つ立てられ、かしの橋ではぶち擲かるゝ憂き目に合うても、この身の罪にくらぶれば、まだくゝ業の果しやうが足らぬと、未来がなほしも恐ろしい、この上のお願ひには、娘のお君お目見得と申すは慮外、ただ非人の子と思し召したつた一言お詞を、おかけなされて下され」

と、歎けば、お君も手を合はせ

「申し旦那様奥様、ほかに願ひはござりませぬ、お慈悲に一言ものおっしゃつて、下さりませ」

と言馴れし、袖乞ひ詞に、浜夕が

「可愛やくゝな、子心にさへ身を恥ぢて祖父様ともばゞ様とも、得云はぬやうにしをつたは皆おのれが

淫奔ゆへ、畜生のやうな腹から見事犬猫も産みをらず、生れ落ちると乞食さす子を、アレあのやうにおとなしう産み付けざまはなにこそぞ、あんまり憎うておりやものが云はれぬくゝ」

と、むごう云ふのは可愛さのうらの浜夕、幾重にも

「お慈悲くゝ」

と泣くばかり、儼仗なほも声荒らか

「親が難儀に合はうが合ふまいが、女めがいらざる世話、同じ姉妹でも妹の敷妙は、八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄、姉めは下郎を夫に持てば、根性までが下司女め」

と、恥ぢしめられて『わっ』と泣き

「ナウ下司下郎とはお情けない、夫も元は筋目ある侍、黒沢左中とは浪人の仮りの名、別れた時の夫の文に、筋目も本名も書いてござんす、これ見て給べ」

と差出すを、取り次ぐ紙のはしくれも『詫びの種にもなれかし』と、思ふは母より、直方が、読む文体の奥の名に

『奥州安倍貞任』とは南無三宝、さては貞任と縁組みしか」

と心もそごろに懐中の、一通取り出し引合はせば

「さてこそ同筆、ハア」

『はつ』とばかり当惑の、色目を見せじとずんど立ち

「ヤア穢はしいこの状、いよ／＼以つて逢ふことならぬ、サア奥こちへ、ハテぐづゝかずとはよおぢやれ」

と、鋭い詞にせがまれて、母もせひなく立つて行く。

「なうコレ暫し、もう逢はうとは申しませぬ。お身の難儀のその訳をどうぞ聞かして下さりませ、申し／＼」

と、伸び上り、見れど旨の垣覗きはや暮れ過ぐる風につれ、折からしきりに降る雪に身は濡鷺の芦垣や、中

を隔つる白妙も

「天道様のお憎しみ、受けしこの身は厭はねど、やうす聞かねばなんぼでも、去なぬ／＼」

と、泣く声も嵐と、雪に埋もれて

「聞こえぬ父」

と恨み泣き、次第、々々に降り積る、寒気に膚も冷

えきれば、持病の癩の差込んで、かつぱと転べば、お

君はうろ／＼、さする背中も釘氷、涙片手にわが着物、

一重を脱いで母親に、着せてしよんぼり白雪を、すく

ふて口に含ますれば、やう／＼に顔を上げ

「ヲ、お君もうようござる、このまた冷えることわい

の、そなたは寒うはないかや」

「イエ／＼私は、温うござります」

「よう着てあやるか、ドレ／＼、ヤアそなたはこりや裸身、着る物はどうしやった」

「アイあんまりお前が寒からうと思ふて」

「ヘツエ親なればこそ子なればこそ、わしがやうな不孝な者がなにとして、そなたのやうな孝行な子を持つた。これも因果のうちかや」

と抱きしめ／＼泣く涙、堪へかねて垣越しに襦袢うちかけひらりと浜夕が

「さつきにから皆聞いてゐる、儘ならぬ世ぢやな、町人の身の上ならば、若い者ぢやものいたづらもせいぢや、そんなよい孫産んだ娘、ヤレでかしたと呼び入れて、聳よ舅といふべきに、抱きたうてならぬ初孫の顔もろくに得見ぬは、武士に連れ添ふ浅ましさと諦めて去んでくれ、ヨ、ヨ」

と云ふうちに

「奥浜夕」

と呼ぶ声に

「アイ／＼そこへ参ります、娘よ孫よもうさらば可哀の者や」

と、老いの足見返り／＼奥へ行く。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。